

学級のきまりや約束を共有しよう

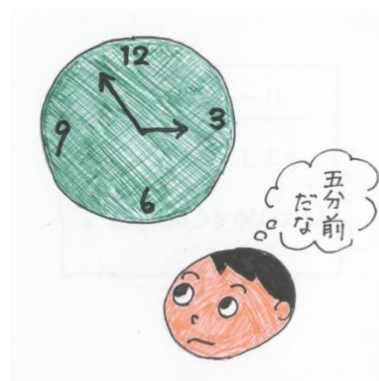
安心感のある 学級づくり



目次

○望ましい学級集団をつくっていくためには？	1
○みんなが楽しく過ごせるきまりや約束を共有していくために	3
I. 学級づくりは4月が肝心	3
II. きまりや約束を守ろうとする気持ちに関わる要素	3
III. きまりや約束を大切にしようになる過程	4
IV. きまりや約束を共有する働きかけ	4
○学級にきまりや約束を共有する教師の働きかけ	5
I. 目的をもつことができるようにする	5
II. きまりや約束を明示する	6
◆教師がきまりや約束を示す	
◆きまりや約束を意識できるように働きかける	
◆学校生活の各場面でのきまりや約束	
【学習の時間】	
【休み時間】	
【給食時間】	
【掃除時間】	
【自習時間】	
【係活動】	
【朝の会・帰りの会】	

Ⅲ. きまりや約束を守ろうとする雰囲気をつくる	17
◆個人に対する働きかけ	
◆集団に対する働きかけ	
Ⅳ. 振り返り（評価）をする	26
Ⅴ. 人間関係をつくる	28
◆信頼関係を築いていくために	
◆信頼関係を築く教師の姿勢	
○学級にきまりや約束を共有する教師の働きかけのまとめ	31
○よりよい学級集団へ	31



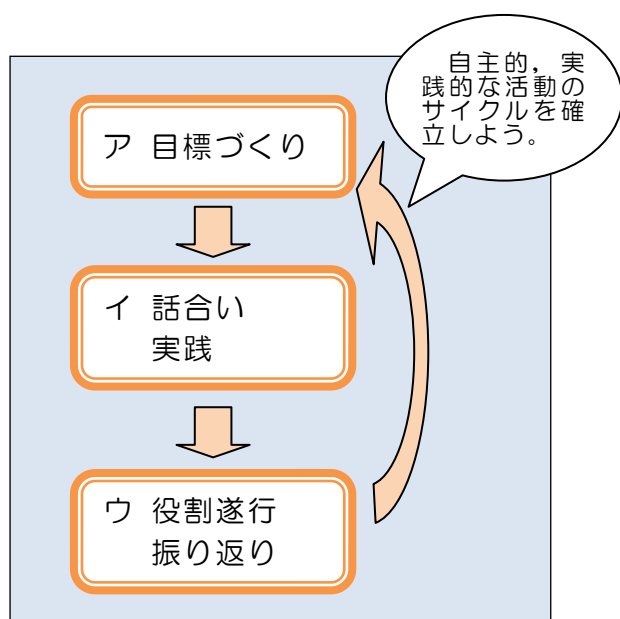
○望ましい学級集団をつくっていくためには？

「子どもたちが意欲的に活動する学級」「一人一人の居場所がある学級」「だれかが困っていたら助け合える、そのような思いやりのある学級」など、望ましい学級集団と言われると様々なイメージを思い浮かべることができます。このような、子どもたち一人一人が楽しく過ごし、自分の可能性を伸ばしていくことのできる学級をつくっていくことは、担任ならばだれもが願うことだと思います

では、そのような集団をつくっていくためにはどうしたらよいのでしょうか。『学習指導要領解説特別活動編』に、次のような望ましい集団活動の一般的な条件が挙げられています。

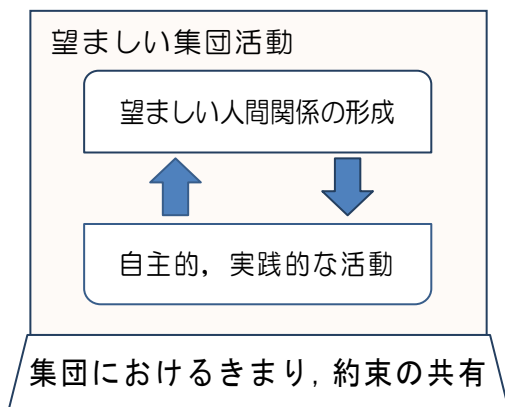
望ましい集団活動の一般的な条件

- ア 活動の目標をつくり、その目標について全員が共通の理解をもっていること。
- イ 活動の目標を達成するための方法や手段などを全員で考え、話し合い、それを協力して実践できること。
- ウ 一人一人が役割を分担し、その役割を全員が共通に理解し、自分の役割や責任を果たすとともに、活動の目標について振り返り、生かすことができること。
- エ 一人一人の自発的な思いや願いが尊重され、互いの心理的な結び付きが強いこと。
- オ 成員相互の間に所属感や所属意識、連帯感や連帯意識があること。
- カ 集団の中で、互いの良さを認め合うことができ、自由な意見交換や相互の関係が助長されるようになっていること。



アは「目標づくり」について、イは「目標達成のための話し合いと実践」について、ウは「役割遂行と振り返り」について書かれています。ア～ウを順に見ていくと、目標づくり→話し合い・実践→役割遂行・振り返りという活動の流れになっています。この流れを子どもたちが意識できるようになると、自分たちで活動が進められるようになり、主体的な活動がうながされていきます。望ましい集団活動を行うためには、子どもたちに活動の方法を教え、自分たちで活動できる「自主的, 実践的な態度」を養っていくことが大切です。

エ～カは、子どもたちが望ましい人間関係を形成していくために必要な条件です。まず、エの条件のように、自分の思いを出すことができ、それを受けとめてもらえる人間関係があり、一人一人が安心して活動できることが大切になります。そして、オの条件のように所属感や連帯感を感じることができるようになり、更には、カの条件のように一人一人の良さが認められ、発揮できることへとつながっていきます。



このような条件を満たしていけるように学級経営を行っていくことが、望ましい集団をつくっていくことになります。そのためには、教師が子どもの活動を支援していくことが大切です。しかし、あまり教師の介入が多くなりすぎると、子どもたちが人間関係をうまく築けないことが出てくることもあります。したがって、教師の介入が多くなりすぎないように、子どもたちの自主的, 実践的な活動のスパイラルをつくっていく必要があります。自主的, 実践的な活動の中で、

子どもたちは、望ましい人間関係を築いていくことができます。望ましい人間関係が築かれることで、自主的, 実践的な活動もまた活発になっていきます。

更に、望ましい集団活動を行っていくためには、上記の六つの条件に加えて、「学級のきまりや約束を学級のみんなで共有し、守られた状態を保つこと」が必要になります。これは、六つの条件を根底で支えるものとして位置付けることができます。学級がまとまっていくために必要なきまりや約束を、みんなで共通理解して守っていくことができるようにしていくことが大切です。

きまりや約束は、ときに堅いイメージをもたれ、子どもたちを縛り付けるものとしてとらえられることがあります。しかし、学級に何のきまりや約束もなければ、学級としてまとまることはできません。人が集まれば、一定のきまりや約束が必要になります。つまり、人間関係を円滑にしたり、よりよい集団をつくっていったりするために、きまりや約束は必要であるという思いをもてるようにすることが大切になっています。

子どもたちにアンケートを行い、「きまりや約束を守ることは大切か」と「学校生活が楽しいか」との関連をみました。(右表参照) 表を見ると、きまりや約束について否定的にとらえている子どもは、学校生活を「どちらかといえば楽しくない」「楽しくない」と否定的にとらえていることがわかります。きまりや約束を大切にすることで、学級の中でうまく人間関係が築けたり、うまく集団生活を送れたりし、学校生活が楽しくなるのではないかと考えます。すなわち、きまりや約束は肯定的にとらえることが大切なのです。

		あなたは学校生活が楽しいですか。			
		楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえば楽しくない	楽しくない
守ることはクラスのきまりや約束を大切に思いますか。	そう思う	61%	31%	6%	2%
	どちらかといえばそう思う	32%	47%	14%	7%
	どちらかといえばそう思わない	0%	0%	57%	43%
	そう思わない	0%	0%	0%	100%

有効回答数 244
(3年生 27 4年生 92 5年生 42 6年生 83)

○みんなが楽しく過ごせるきまりや約束を共有していくために

I. 学級づくりは4月が肝心

新しい学級がスタートする4月は、子どもたちも気持ちを新たに、「よし、やるぞ!」という意欲が高まる時期です。この時期に気持ちよくスタートを切ることができるように、教師が一定の方向付けをしていきます。授業規律や人間関係をつくっていくための約束事については、教師としての考えを示し、子どもたちが「間違っても、大丈夫。」「友だちは優しく接してくれる。」というような思いをもち、安心して活動ができるようにすることが大切です。

新しい学年での学級のスタート時には、初めから学級のきまりや約束が共有されているわけではありません。これは、子どもたちにきまりや約束を守ろうとする気持ちが全くないということではなく、学級が新しくなり、大切にしていきたいきまりや約束に対しての意識のもち方が、各々違っているということです。もちろん、前の学年で積み上げてきたものや、学校で大切にしてきたことがあります。その上に立って、改めてどのような学級にしたいのか、よりよい学級にしていくためにどのようなきまりや約束が必要なのかということ子どもたちとともに考え、早い段階で学級のきまりや約束をつくっていきます。特に第1学年に関しては、文化や習慣の違う様々な幼稚園や保育所から子どもたちが集まってくるわけですから、ていねいに学校や学級のきまりや約束を伝えていく必要があります。

II. きまりや約束を守ろうとする気持ちに関わる要素

子どもたちが学級のきまりや約束を守ろうとする気持ちに関わる要素は次の3点があると考えます。

- ① 教師の存在
- ② 友だちの存在
- ③ きまりや約束の意義



- 大切にしたいこと
 - ・よりよい人間関係を築く。
 - ・きまりや約束の意義を伝える。

《①教師の存在》

子どもたちは、きまりや約束を守れば教師にほめられ、守らなければ叱られます。このようなことを繰り返して、きまりや約束を守ろうとする気持ちを高めていきます。教師が子どもたちとよりよい人間関係を築くことで、教師が示すきまりや約束を守ろうとする子どもたちの意識が高まります。

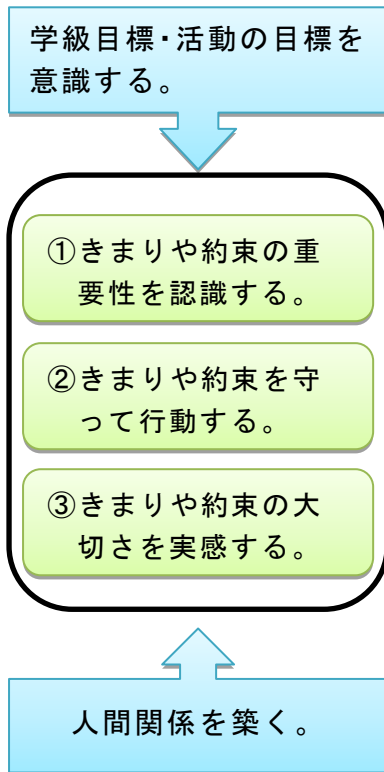
《②友だちの存在》

子どもは、友だちや学級の集団に、自分がどのように見られているかを意識して行動します。友だちの意見に付和雷同して行動することもあります。お互い注意し合えるような関係や高め合うことのできる関係をつくっていくことが大切です。

《③きまりや約束の意義》

決められたきまりや約束が意義のあるものでなければ、子どもたちの守ろうとする気持ちは高まりません。どうしてそのきまりや約束が必要なのかということを理解できるように働きかけることが大切です。

Ⅲ. きまりや約束を大切にできるようになる過程



きまりや約束の大切さを感じるようにしていくためには、まず、「①きまりや約束の重要性を認識する」ことが大切です。そのきまりや約束について知らなければ、守ることはできません。また、知っていても重要であると思わなければ、守ろうとする意識は低くなります。

次に、「②きまりや約束を守って行動する」必要があります。「やってはいけない」とわかってはいても、やってしまうことがあります。きまりや約束と自分の欲求との間で葛藤しながら、きまりや約束を守って行動する経験を積むことが大切です。

最後に、「③きまりや約束の大切さを実感する」ことが必要です。きまりや約束を守って行動したことで、望ましい結果が得られたという経験を積み重ねることで、守ろうとする思いを強くすることができると思います。

①～③に加えて「学級目標・活動の目標を意識する」「人間関係を築く」ことが大切です。子どもたちが、学級の目標や活動の目標を意識することで、「きまりや約束はその目標を達成するために必要である」と、きまりや約束を肯定的にとらえることができるようになっていきます。また、教師や友だちとの関係が、きまりや約束を守ろうとする気持ちに影響します。人間関係がうまくいっていれば、きまりや約束を守ろうとする気持ちが強くなり、うまくいってなければ、守ろうとする気持ちは弱くなるでしょう。まずは、教師が子どもと信頼関係を築くことができるように働きかけることが重要です。

Ⅳ. きまりや約束を共有する働きかけ

きまりや約束を共有していくために、教師はどのような働きかけをしているのでしょうか。きまりや約束を守ることができるようにしていくことは、一人一人の子どもの良さを引き出していくために大切なことです。しかし、あまり管理的な側面が強くなりすぎると、学級の雰囲気が悪くなるという難しさがあります。そこで、教師の一方的な押し付けにならず、子どもたちが、きまりや約束は大切であると感じ、自ら守っていこうとする思いを育んでいけるようにすることが大切です。次ページに、そのような学級の雰囲気をつくる教師の働きかけを、五つのポイントに分けて述べていきます。



○学級にきまりや約束を共有する教師の働きかけ

- I. 目的をもつことができようにする
- II. きまりや約束を明示する
- III. きまりや約束を守ろうとする雰囲気をつくる
- IV. 振り返り（評価）をする
- V. 人間関係をつくる



I. 目的をもつことができるようになる

きまりや約束は、「よりよい人間関係をつかっていくため」「よりよい成長をしていくため」に存在します。きまりや約束を守ることは手段であって、守ることが目的にならないようにしなければなりません。そのために、学級目標や活動の目標を意識することができるようにします。「目標に向って成長していくために、きまりや約束を守っていく必要がある」という目的をもたせることが大切です。

子どもたちのアンケート結果より、学校生活の中で、目標を「とても」意識していると回答した子どもの98%が、きまりや約束を守っていると肯定的（「いつも」「だいたい」）な回答をしています。それに対して、「ぜんぜん」意識していないと回答した子どもたちは、きまりや約束を守っていると肯定的な回答をした割合が58%に留まっています。

「目標を意識する」と「きまりや約束を守る」との関連

		あなたはクラスのきまりや約束を守っていますか。			
		いつも	だいたい	あまり	まったく
あなた は 学校 生活 の中 で ク ラス 目 標 を 意 識 す る こ と が あ り ま す か。	とても	59%	39%	2%	0%
	ときどき	15%	77%	7%	1%
	あまり	10%	64%	26%	0%
	ぜんぜん	11%	47%	26%	16%

有効回答数 244
(3年生 27 4年生 92 5年生 42 6年生 83)

子どもたちと学級目標をつくろう

学級目標を設定するときは、教師の願いや子どもの思い、保護者の願いを考慮する必要があります。三者の願いや思いが重なるような学級目標になることが望ましいでしょう。まずは、教師がどのような学級にしていきたいのかを子どもたちに伝えます。そのときに保護者の願いも伝えられるとよいでしょう。家庭環境調査票などに書かれている保護者の願いを事前に把握しておきます。

そして、子どもたちが話し合い、学級に合った目標をつくり、「自分たちで決めた目標だ。」という意識をもてるようにすることが大切です。決められた目標ではなく、自分たちで決めた目標ですから、より大切にすることができるでしょう。学級目標をいつも目にするところができる場所に掲示し、1年間意識できるようにします。朝の会で、学級目標をみんなで声に出して読んだり、何か学級目標につながるがあれば、すかさず教師が子どもたちに伝えたりしながら、学級目標を軸に学級づくりをしていきたいものです。

Ⅱ. きまりや約束を明示する

◆教師がきまりや約束を示す

学級にきまりや約束を共有していくためには、まず、教師が「きまりや約束を示す」ことが必要です。学級目標に向かって成長していくためには、どのようなきまりや約束が必要かを考え、子どもたちにわかるように示していくことが大切です。きまりや約束を明示するときのポイントは以下の3点です。

- ①きまりや約束は、行動目標的な示し方をする。
- ②はじめは、いつも以上にていねいに説明する。
- ③きまりや約束を、実際に確認しながら説明する。

①きまりや約束は、行動目標的な示し方をする。

きまりや約束を「～しよう」という形で表します。「～してはいけません」といったように、禁止事項が多くならないようにすることが大切です。しかし、発達段階や学級の実態によっては、「～してはいけません」というような形で表すほうが子どもたちにとってわかりやすくなることもあります。また、いじめにつながることや命に関わることなど、絶対にしてはならないことは「いけないことはいけない」と強く示していかなければなりません。

②はじめは、いつも以上にていねいに説明する。

学級の担任が変わるときは、学級の約束も変わることがあります。学校のきまりや約束について、教師間で共通理解はしているものの、それぞれの教師の持ち味によって、細かい約束事が違ってきます。小さな約束事の違いが、子どもにとっては大きな違いとして感じられることもあります。それがストレスとなり、たまれば不満となって現れることもあります。「当然わかっていることだろう」と説明を怠れば、そこに困りを感じる子どもが出てきます。やり方を変える場合は、子どもたちがやり方に慣れるまで、ていねいに説明することが大切です。また、子どもたちが行ってきたやり方を尊重することも大切です。

《年度初めに確認しておく方がよいきまりや約束》

- 朝、学校に来てからすることについて
- 朝の会や帰りの会のもち方について
- 給食当番のきまりや約束について
- 給食のきまりや約束について
- 掃除の仕方について
- 学習のきまりや約束について
- 休み時間の遊び方や道具の使い方について
- 自習時間のきまりや約束について

など

③きまりや約束を、実際に確認しながら説明する。

一度説明したからといって、子どもたちがすぐにできるとは限りません。むしろ、できないことの方が多いと思います。できない子どもは、反抗的にやらないというよりも、わかっていないためにできないことが圧倒的に多いはずです。実際に何度かやってみないと、きまりや約束に沿って行動することが難しい子どももいます。このような状態のときに叱っても逆効果です。下の学年ほど、ていねいな説明が必要です。言葉での説明に併せ、その状況を再現しながら説明していくと、子どもたちが具体的にイメージをもつための手だてになります。

◆きまりや約束を意識できるように働きかける

示されたきまりや約束について、子どもたちが日常的に意識できるようにするために、教師が粘り強く働きかけていくことが必要です。そのとき、「なぜ守らないといけないのか」「どのようにしたら守れるのか」「守る（守らない）とどのような気持ちになるのか」といった子どもの認知面、行動面、感情面にバランスよく働きかけることが大切です。きまりや約束の意義を知ることで、重要であると認識することができ、行動の仕方を学ぶことで、きまりや約束に沿った行動ができるようになるからです。そして、守ったとき、どのような気持ちになるのかを考えることで、きまりや約束を守ろうとする気持ちが高まるのではないのでしょうか。



〈認知面への働きかけ〉

- ・朝の会や帰りの会などで、学習や生活のきまりや約束の意義について話したり、振り返ったりする。
- ・学習や活動を行う前に、きまりや約束を確認する。

〈行動面への働きかけ〉

- ・学習や活動の中で、どのように行動したらよいかということの一定の型を事前に知らせたり、事後にできていたかどうか振り返ったりする。

〈感情面への働きかけ〉

- ・日常生活の中できまりや約束を守って行動している姿を取り上げ、その良さを子どもたちに伝える。
- ・学習や活動の中で、きまりや約束を守った（守らなかった）ときの気持ちを交流する。

○給食の時間のきまりや約束を例に挙げると・・・

認知面

- ・なぜ守らないといけないのか

「給食時間にみんなが歩き回っていたら、給食当番さんにぶつかったり、落としてしまったりして危険ですね。」

行動面

- ・どのようにしたら守ることができるのか

「給食時間は、用事のある人以外は座って待つようにしましょう。例えば、本を読んで待つのもいいですね。」

感情面

- ・守る（守らない）とどのような気持ちになるのか

「給食時間中に歩き回って、当番さんにぶつかったら、当番さんはどのような気持ちになりますか。」

◆学校生活の各場面でのきまりや約束

よりよい学級にしていくために、学校生活の各場面で大切にしたいきまりや約束があります。「学習の時間」「休み時間」「給食時間」「掃除時間」「自習時間」「係活動」「朝の会・帰りの会」に分けてまとめました。

【学習の時間】

授業は、学校生活の中で、一番長い時間を占めます。授業において学習のきまりや約束を確立することは、学校生活のリズムをつくっていくことになります。そして、学校生活のリズムが整ってくれば、子どもたちは生き生きと活動することができるようになります。まず、教師が学習のきまりや約束を意識し、一定の型を子どもたちに示します。そして、粘り強く働きかけ、学級にきまりや約束を守る雰囲気をつくっていきましょう。

1. きき方のルール

「きくことができる」ということは、学習だけではなく、学校生活を築いていく上で欠かすことのできないものです。「きくことの意義」「きくときの姿勢」「きくときの心構え」を子どもたちに伝え、系統的に指導、支援していくことが求められます。

〈きき方のルールを共有していくために ー認知面への働きかけー〉

きくことの大切さを日常的に伝えていくことが大切です。「相手の思いをきこうとする姿勢から、人とのコミュニケーションが生まれる。」「きくことで、新しい知識を得たり、考えを深めたりすることができる。」「きくことは、人を大切にすることにつながる。」「きくことは、自分を高めることになる。」など、きくことの意義を伝え、しっかりきこうとする気持ちをもつことができるようにしてきます。

〈系統的にきき方を指導する ー行動面への働きかけー〉

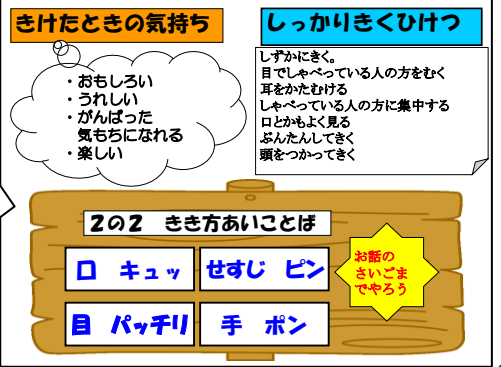
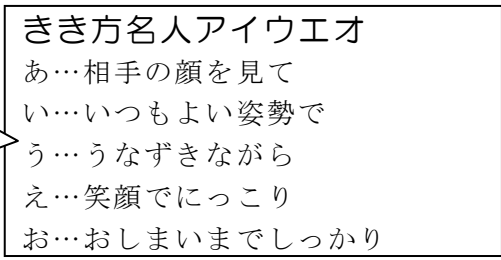
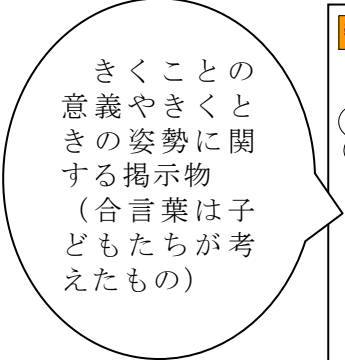
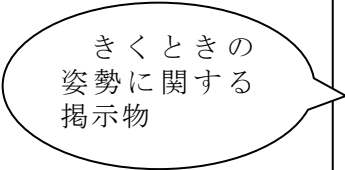
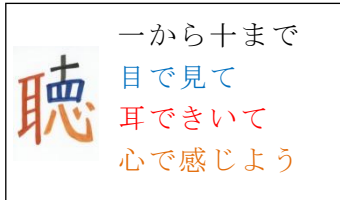
- 静かにきく（聞く）…誰かが話し出したら静かにする。
- 体を向けてきく（聞く）…話している人の方を向いて話をきく。
- 心を向けてきく（聴く）…話している人の顔を見て心を向けて話をきく。
- 考えや思いを比べながらきく（聴く）…自分の考えと比べながら（同じ、違うなど）きく。
- 心をきく（聴く）…内容だけではなく、話し手の思いを深くきく。

そのほかには…

- 姿勢を正してきく。
- うなずきながらきく。
- 最後まできく。
- メモをしながらきく。
- 笑顔できく。

など

きき方のルールに関する掲示物



2. 話し方のルール

子どもたちがみんなの前で話すときに気を付けたいルールです。日常で話すときと学習で話すときとを区別して話すことができるようにすることが大切です。話し方のルールや話型を示すことで、子どもたちが人前で話したり、自分の思いや考えを伝えたりできるように指導、支援していきます。

〈話し方のルールを共有していくために 一認知面への働きかけ〉

みんなの前で自分の思いや考えを話すことの大切さを日常的に伝えていきます。「思っているだけでは、自分の思いや考えが相手に伝わらない」「人とよりよい関係を築いていくために必要なものである」「話すことで考えが整理される」など、話すことの意義を伝えます。そして、他者に対して自分の思いや考えを上手に伝えるために、ルールや話型があることを伝えていきます。

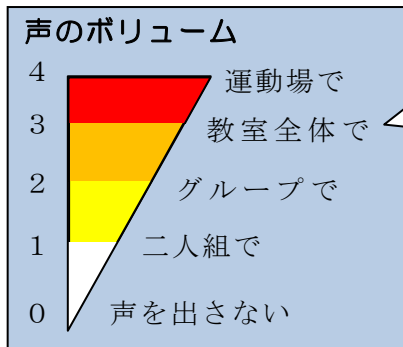
〈話し方のルールを示す 一行動面への働きかけ〉

<ul style="list-style-type: none"> □ 挙手して、指名されてから話す。 □ 相手に届く声で話す。 □ ていねいな言葉遣いで話す。 □ 姿勢を正して話す。 □ 相手の顔を見て話す。 など 	
--	--

〈話型を示す 一行動面への働きかけ〉

- はい、～です。～だと思ひます。
- はい、〇〇さんと同じで（似ていて）～だと思ひます。
- はい、〇〇さんと違って～だと思ひます。
- はい、〇〇さんに付け足しで～だと思ひます。 など

話し方のルールや話型に関する揭示物



話し方のルールに関する揭示物

話型に関する揭示物

学習のまとめを言葉で表そう
 今日のめあては、～でした。
 ～の時、～でした。
 ～が分かりました。
 ～の時、～考え(思)いました。
 わたしは、～について学びました。
 これから、～を～に生かしたいです。

「同じです。」を大切に

算数の時間です。何人かの子どもが先生の質問に対して挙手をしました。一人の子どもが発言し終わった後に、先生がもう一人答えてもらおうと教室を見渡しましたが、手を挙げる子どもはいませんでした。そこで、先生は意図的に、先ほど手を挙げていた子どもの一人を指名しました。

T：では、〇〇さん、どうですか。

C：やっぱり・・・(発表しづらい様子)

T：同じでもいいですよ。

C：(すっと立ち上がり) 4 cm^2 の面積の正方形が六つ並んでいるから、 4×6 で 24 cm^2 です。

指名された子どもは、前の発言と同じになると思ったのか、「やっぱり…」と発言しにくそうな様子を見せていました。そのときに、先生が「同じでもいいですよ。」と一言伝えることで、すっと立ち上がり、自信をもって発表することができました。

子どもの心の中には、「同じではいけない」「前の人よりもよい意見を言わなくてはいけない」という思いがあるようです。このような思いが、発言しにくい雰囲気をつくる教室をつくってしまうことがあります。発言しにくい雰囲気をつくらないためにも、「同じでもいい」という意識を子どもにもたせることが大切であると思ひます。

同じことでも、何回もきくことで子どもの理解の助けになることがあります。また、子ども自身が同じであると思ひていても、ちょっとした違いがあり、そこを取り上げることで考えを深めていくことができることもあります。

そして、「同じでもいい」の最大のメリットは、友だちの発言に対して共感的な発言を増やしていくことができるということです。「〇〇くんと同じで～です。」と言ってもらえると、発言した子どもは安心した気持ちやうれしい気持ちになるのではないのでしょうか。

3. 話合いのルール

子どもたちが考えを深めたり、みんなで意見を一つにまとめたりするときに話合い活動が大切になります。よりよい話合いにしていくために、話合いのルールが必要になります。ルールを示すことで、一人一人が安心して自分の意見を発言することができるようにしていきます。そして、一人一人の意見が生かされるような話合いになるようにしていくことが大切です。

〈話合いのルールを共有していくために ―認知面への働きかけ―〉

しっかりきかなかったり、冷やかしたりするような雰囲気があれば、子どもたちは安心して自分の意見を言うことができなくなります。みんなで意見を出し、話し合うことで、よりよい学級をつくっていくことができることを子どもたちに伝えていきます。「みんなで話し合って、意見を決めていくことが大切である」「一人一人が意見を出すことができるように、安心できる雰囲気をつくっていく必要がある」「しっかり人の話をきいて、それを受けて自分の意見を言うことで、よりよい話合いをしていくことができる」など、話し合うことの意義を伝え、みんなで学級をつくっていきます。

〈話合いのルールを示す ―行動面への働きかけ―〉

- 理由をつけて話す。
- 議題やめあてを意識して話す。
- 前の発言につなげて話す。
- 友だちの意見を大切にする。
- 自分の考えと同じところ、違うところを意識してきく。
- よりよい意見になるように考えながらきく。 など

〈話型を示す ―行動面への働きかけ―〉

- わたし（ぼく）の意見は（ ）です。その理由は（ ）だからです。
- わたし（ぼく）は（ ）がいいと思います。その理由は、（ ）だからです。
- （ ）さんの意見に付けたして、（ ）です。
その理由は、（ ）だからです。
- （ ）さんの（ ）というところが、大変よいと思います。
その理由は、（ ）だからです。
- （ ）さんの意見をきいて、（ ）に変わります。その理由は、
（ ）だからです。
- （ ）さんの意見と違って、（ ）です。
その理由は、（ ）だからです。

4. 学習のルール

学習のルールを定着させることは、学級を集団とし、個々の望ましい成長を支えることにつながります。学級の子どもたちにもどのような姿をめざすのか、しっかりとしたビジョンをもつことが、一貫した指導へとつながります。また、学習ルールといっても様々なきまりや約束があり、教師によって認識が少しずつ違うことがあります。学年や学校で共通理解しておくことで、子どもたちも混乱することなく4月から学習に望めます。

〈学習のルールを共有していくために 一認知面への働きかけ〉

学習のルールは、子どもたちの学習に対する姿勢を整えたり、学習の効率をよくしたりするためにあります。「学習に対する姿勢を整えると、気持ちよく学習に取り組めるようになる」「持ち物を整理することで、集中して学習できるようになる」「みんなで気持ちを一つにして学び合う気持ちを整えよう」など、学習ルールを守る意義について伝え、学習ルールを共有し、学習規律を確立できるようにしていきます。

「きちんと整理整頓しなさい」というけれども…

中間休みに1年生の教室を見にいくと、図1のように、算数の学習の準備ができていて、机の上がきれいに整理整頓されていました。ほかの子どもの机はどうだろうと教室を見渡してみると、やはり他の子どもたちもきっちり準備ができています。よく見ると、整理の仕方がみんな同じです。教科書、ノート、下敷きの上に筆箱と数図ブロック、更には上にはおはじきが乗っています。そして、そのセットが図2のように机の左端に置かれていました。

「休み時間は早く遊びに行きたいのに、ちゃんと整理整頓できているなんてすばらしいな。」と感心していると、壁に貼られた掲示物が目に入りました。それは、図3のお道具箱の整理の仕方を示したものでした。これを見て、「なるほど、やっぱり子どもたちがきちんと整理整頓できるように、ていねいに指導されているのだな。」と感じました。

「きちんと整理整頓しなさい。」とよく言いますが、子どもたちは「きちんと」の意味がよくわかっていないことがあります。どのようにすることが「きちんと」することなのか、図3のお道具箱の整理の仕方のように具体的に示し、粘り強く指導、支援していくことで、子どもたちは整理整頓の仕方を学んでいくと思います。初めはていねいすぎるぐらいていねいに教えていくことが大切ですね。



図1



図2



図3

〈学習のルールを示す 一行動面への働きかけ〉

(学習のルールの例)

□授業の挨拶の仕方

→声を合わせる。

休み時間とのメリハリをつける。
学習に対する意欲を高める。

学年や学級の実態に応じて、学習のルールを設定しましょう。子どもたちの成長をうながすルールを設定することが大切です。また、学校で共通理解することも大切です。

□ノートを取り方

→めあて、学習の内容、まとめ、学習感想といったノートの取り方を示す。

学習を振り返ることができるノートづくりをする。自分なりのノートをつくる足がかりにする。

□持ち物

→鉛筆 5本 赤鉛筆 1本 消しゴム 1個など決めておく。

忘れ物をしないように準備する。

学校に必要なものを持ってこない。持ち物の乱れが生活の乱れにつながっていることも少なくない。鉛筆の本数などは、子どもたちと一緒に考えて設定することが望ましい。

□時間を守る

→チャイムの合図で席につく。遊ぶ前に次の授業の準備をする。

集団生活で時間を守ることは大切なことである。しっかりと時間に気を付けて行動できるようにしたい。また、次の授業の準備をしておくことで、スムーズに学習に入ることができる。

□机の整理整頓

→机の上には必要なものだけ出す。机の中は決まったところに入れる。

落ち着いて学習するためには、机の上が整理された状態であることが大切である。身の回りが整理されれば、自然と集中力は増してくる。

□姿勢の正し方

→背筋を伸ばして座る（机とおなかの間に、こぶし一つ分、机と頭の間には手を広げて二つ分など）。また、正しい姿勢を取るために椅子と机の高さ調整をする必要があります。

姿勢を正すことで、学習への集中力や意欲を高めることができる。身体の成長にもよい姿勢を保つことは欠かせない。よい姿勢を長く続けることは、子どもの耐性をつけることにもつながる。

□片付けの仕方

→元の場所、元の形にして片付ける。活動時間内に片付けの時間も設定する。

右の写真のように、何をどのように返したらよいのかをひとめでわかるようにし、子どもが自分で動くことができるようにしておく。



【休み時間】

休み時間は学習の時間などと違い、子どもたちが自由に活動することができる時間です。そのため、けんかや揉め事などのトラブルも出てきます。遊びのルールなど、ある程度、教師が整理することで楽しく遊べるようにすることが大切です。しかし、教師が全て決めてしまうことは避けるべきです。子どもたちは、友だちとの揉め事を経験しながら、どのように行動していくことが大切なのかという人間関係のルールを学んでいきます。子どもたちが上手によりよい人間関係を築いていく力を付けていくことができるように、教師が支援していくことが大切です。

1. 遊びのルール

特に低学年では、ちょっとした遊びのルールの違いから、揉め事が起きることがあります。そのようなときは、子どもたちとどのようなルールにするかを話し合い、学級全体で確認します。みんなで共通理解することで、その学級のルールとして定着するようにしていきます。

ボールの使い方なども共通理解しておくことが大切です。みんなで楽しく遊べるように、細かいルールは学級で共通理解しておきましょう。

- | | |
|--------------------------------------|--|
| <input type="checkbox"/> ボールの使い方について | <input type="checkbox"/> 時間を守ることにについて |
| <input type="checkbox"/> 遊具の使い方について | <input type="checkbox"/> 道具の片付けについて など |

2. 人間関係のルール

休み時間には、多くの友だちと遊ぶことで、人間関係を築いていく上での大切なルールを学んでいきます。学級で全員遊びの日を設定するなどして、豊かな人間関係を築くことができるように支援していくことが大切です。トラブルが起きたときは、できるだけ子どもたちで解決できるようにし、必要なとき以外は、教師は子どもたちの様子を温かく見守るようにしましょう。

- | | |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 友だちを思いやることにについて | <input type="checkbox"/> 友だちと協力することにについて |
| <input type="checkbox"/> お互いに譲り合うことにについて | <input type="checkbox"/> 話し合っ解決することにについて |
| <input type="checkbox"/> 約束を守ることにについて | など |

【給食時間】

給食時間には、給食当番の仕方や配膳の仕方、おかわりの仕方などのルールを確認しておくことが大切です。「残してもいいですか。」「おかわりは自由ですか。」など、子どもがきいてくることに一人一人答えていると、基準が曖昧になることがあります。そのことが子どもたちの不公平感を生むことがあるので注意が必要です。大人からすれば「そんなことぐらいで。」と思うこともあるかもしれませんが、給食のおかわりの仕方や給食の量といったことは、子どもたちにとっては大きな問題なのです。

1. 給食当番の仕方

スムーズに活動することができるように、給食当番のきまりや約束をあらかじめ提示しておきます。前の学年で行ってきたやり方を尊重しながら、学年に合わせたやり方を考えていくとよいでしょう。

- 給食当番の分担の仕方
- 給食当番の並び方，歩き方
- 食器の運び方
- 配膳の仕方（残飯が出ないように） など

2. 給食のルール，マナー

給食の量を調整したり，おかわりをしたりするときなどのルールを決めておきます。また，給食で大切にしたいマナーも教えていくことが大切です。命を頂いていること，自分たちのために給食調理員さんが心を込めてつくってくださっていることへの感謝の気持ちを育みたいですね。



- 給食の減らし方について（多い場合は初めに減らしておくなど）
- おかわりの仕方について（欲しい人に配りきってしまうなど）
- 食事のマナーについて（全て食べきる，騒がない，給食放送は静かにきくなど）
- 感謝を込めて「いただきます」「ごちそうさま」をする など

【掃除時間】

掃除時間は，一人一人が自分の役割を果たして行動することで，掃除場所をきれいにすることができます。自分たちが過ごしている場所をきれいにし，落ち着いた環境の中で学習できるようにすることが大切です。

1. 掃除のルール

一人一人の役割を明確にし，分担場所のメンバーと協力しながら掃除に取り組めるようにしていきます。掃除時間は各分担場所に分かれるので，教師が全てに目を行き届かせることはできません。子どもたちの力で，ルールを守って活動できるようにし，自主性を育てていくことが大切です。

- 決められた場所を掃除する
- 各分担場所で掃除の役割を決める
- 時間を守って掃除する
- 掃除道具を大切に扱う
- はじめは教師が掃除の手順を示す など



2. 責任感や協調性を育む

清掃活動を通して，自分の役割を果たすことや，みんなと協力して活動することの大切さを感じられるように，教師が働きかけていくことが大切です。

- 自分の役割を果たす
- ほかのメンバーと協力して行う など

【自習時間】

朝の読書の時間や計算タイムなど、各学校で様々な取組がされています。この時間は、職員の朝の打合せがあり、教師の目が届きにくい時間になります。子どもたちが自分たちで活動し、充実した時間になるように、一定の枠組みをつくっていくことが大切です。

◇自習時間のルール

やることがはっきりしていなければ、子どもたちは自主的に活動することができません。何をするのか、どのくらいすればよいのかということを示しておく必要があります。



- 何をするのかをはっきりさせる
- 静かに集中して行えるようにする
- 事前に準備する（読書なら本を用意しておくなど）
- 目的をもって行えるようにする（読書の一行感想を最後に書くなど）など

【係活動】

係活動は子どもたちの自主的な活動です。学級の生活を豊かなものにするために創意工夫を生かして活動していきます。はじめは、教師が係活動のイメージを子どもたちにもたせ、主体的に活動できるようにしていくことが大切です。

1. 係活動の約束

係活動の中で、できることとできないことをはじめに示し、子どもたちが自主的に活動できるようにするためのルールを設定しましょう。

- 学校にあるもので行う
- 当番的な活動にならないようにする
- お金がかからないようにする
- 時間を守って活動する
- など

2. 自主的な態度を育む

係活動を行う中で、子どもたちが役に立つ喜びを感じ、自主的に活動していくことができるように教師が支援していくことが大切です。

- 計画を立てて活動する
- 活動の振り返りをする
- 各係で進んで発表する
- 各係のよいところを見つける
- など

【朝の会・帰りの会】

朝の会や帰りの会を行うことで、学校生活にリズムをつくっていきます。ですから、気持ちよく朝の会や帰りの会を行えるようにしていくことが大切です。

◇気持ちよく学校生活を送るための約束

- 手順に従って会を進める
- 健康観察で体調を伝える
- みんなで声をそろえてあいさつをする
- 友だちのよいところを見つける
- など

Ⅲ. きまりや約束を守ろうとする雰囲気をつくる

教室の雰囲気をつくっていくためには、初めの対応が大切になります。みんなで確認したきまりや約束が守られない状況が起きたら、うやむやにせず、すばやく対応していくことが必要です。決められたきまりよりも、その場の雰囲気の方が、その集団に及ぼす影響力は強いといわれています。あるきまりに対して、「守らなくてもよい」という雰囲気が出来上がってしまうと、教師がいくら注意しても、その状態を改善していくことは難しくなるということです。また、守られない状態を放っておくと、ほかのきまりや約束にも影響を及ぼしていくことも考えられます。初めに起きたきまりを守っていない状況を見逃さずに対応していくことで、子どもたちに「きまりは大事にしないといけない」「守らなければならない」という意識をもたせることができると思います。

子どもたちがきまりや約束を守ったとき、あるいは守らなかったとき、教師はどのような働きかけをすることが大切なのかというポイントを「個人に対して」と「集団に対して」とに分け、次ページよりまとめました。

■ とある街の風景・・・

エコの意識が高まり、自転車を利用する人が増えてきました。自転車は、便利な乗り物ですが、駐輪場所に困ることが多いようです。停めてはいけないところでも、たくさんの自転車が停まっていれば、ついつい停めてしまうという心理が働いてしまいます。写真①もそのような状態だと思います。しっかりと駐輪禁止の貼り紙がされているにもかかわらず、たくさんの自転車が駐輪されています。

一方、写真②は、すぐ近くの通りなのですが、1台も駐輪されていません。しかも、駐輪禁止の貼り紙もありません。この違いは何なのでしょう。写真②の場所でも、以前はたくさんの自転車が駐輪してありました。しかし、駐輪場が近くにできたときに、それを知らせる係の人が、常にこの場所に立ち、呼びかけていました。止めようとした人に、「ここに駐輪場があります。」と勧め、自転車が1台も停められることがないようにされたのです。その結果、この場所には、自転車を停めてはいけないという雰囲気ができあがり、駐輪する人がいなくなりました。写真①、写真②の様子からわかることは、きまりや罰則をつくっても、それだけでは効果がなく、きまりが守られている状態を保つことが大切であるということです。きまりをつくることよりも、停めてはいけないという雰囲気をつくることの方が効果があることを示す、「とある街の風景」でした。



◆個人に対する働きかけ

個人に対する働きかけは、子どもたちが自らきまりや約束を守って行動しようという意識を高めていくことが大切です。ポイントして次の3点を挙げることができます。この3点について、事例を基に述べていきます。

- 子ども自らがきまりや約束について考え、守ることができるようにする
- 自尊心、自責感にうったえるようにする
- 集団の一員として、他者の期待、他者への迷惑を考えられるようにする

○子ども自らがきまりや約束について考え、守ることができるようにする

教師がすぐに指示を出すのではなく、子どもの自律性に働きかけ、自分たちで行動しようとする意欲を高めていくことが大切です。

子どもに直接、「聞きましょう。」とうながすのではなく、「待っています。(1-5)」と言うことで、今何をしたらよいかを考えることができるようにしています。このことが子どもに「聞かなければ」という気付きをうながしています。その後、子どもは話し手の方を向き(1-6)、きく姿勢をとることができました。

挨拶のときに、子どもたちが姿勢を正していない様子を見て、教師が「何か足りませんよ。(2-3)」と言葉かけをすることで、日直が気付き、「姿勢を正しましょう。(2-4)」と呼びかけています。そして、「よろしくお願いします。(2-7)」と、声を揃えて挨拶をすることができました。

上記の二つの事例では、子どもの行動を改善するために、「どのような行動をとったらよいか」ということを「気付かせる」働きかけをしています。そうすることで、子どもたちが自ら行動しようとする気持ちを高めることができると考えます。また、直接的な指導をしたときよりも、子ども自身が考えて行動するため、教師の押し付けととらえられてしまうことが少なくなるのではないのでしょうか。

「気付かせる」ための働きかけ

『いま、何をするときかな。』と言葉をかける」「できるまで待つ」「視線を送る」など

- 1-1 T : ○○さん。(指名)
- 1-2 C1 : わたしは…。
- 1-3 T : ちょっと待って。○○さん。
- 1-4 T : (聞けていない子の方を向いて)
- 1-5 T : 待っています。
- 1-6 C2 : (話し手の方を向く。)



- 2-1 T : では日直さん挨拶よろしくお願ひします。
- 2-2 日直 : これから1時間目の…。
- 2-3 T : 何か足りませんよ。
- 2-4 日直 : 姿勢を正しましょう。
- 2-5 (みんなが姿勢を正す。)
- 2-6 日直 : これから1時間目の学習を始めましょう。
- 2-7 C全 : よろしくお願ひします。

○自尊心、自責感にうったえるようにする

きまりや約束を守った後、もしくはきまりや約束を守らなかった後、どのようなことが起きるのかを考えさせるようにすることが大切です。

教師が子どもたちに挙手を勧める様子です。自信のなさからか、子どもの挙手が少なかったときに、教師が励ましています(3-1)。更に、「これから自分の考えを進んで伝えられるようになるために(3-3)」と先を予測させています。その後、更に挙手する子どもが増えたことは、先を予測させたことで「よりよい自分になりたい」という子どもの思いを引き出すことができたと考えられます。

これから学習することを説明する際、聞けていない子どもに指導をする様子です。教師の説明に集中できていない子どもに対して、「ここ。ここね。(4-2)」と教師の方に注意を向けさせ、「後で、何するのってなるよ。(4-3)」と注意しています。聞かなかったことで、その先の学習がどうなるかを子どもたちに考えさせる行動を取っています。このことで、子どもたちは、聞かなければ自分が困ることを予想することができたのではないのでしょうか。予想したことで、聞かなければという気持ちをうながし、その後の静かにCDをきく姿につながったと考えます。

きまりや約束を守った結果、もしくは守らなかった結果どうなるかということを実験させることで、自尊心や自責感が働き、きまりや約束を守ろうとする行動につながっていきます。

3-1 T: さあ、がんばって発表しよう。

3-2 C: (何人か手が挙がる。)

3-3 T: 自信をもって。これから、自分の考えを進んで伝えられるようになるために、自分で手を挙げて発表しよう。

3-4 C: (更に多くの手が挙がる。)



4-1 T: 今から、CDのスピーチを聞きますので…。

4-2 T: (これから行うプリントを指さしながら) ここ。ここね。

4-3 T: (プリントを見ていない子どもの方を向き) 後で、何するのってなるよ。

4-4 T: 書き言葉と話し言葉の違いがあるから、プリントに書いてください。後から聞きたいと思います。

4-5 C: (静かにCDをきく。)

自尊心に訴えかける働きかけ

「励ます」「共感する」「ほめる」など

自責感に訴えかける働きかけ

「注意する」「叱る」「語りかける」「諭す」など

○集団の一員として、他者の期待、他者への迷惑を考えられるようにする

自分が所属する集団からの期待を考えることで、期待に添うように行動しようとする意欲が高まります。また、自分の行動で他者にどのような迷惑がかかるのかということを考えることで、規範をやぶって迷惑をかけてはいけないという思いをもてるようにしていくことが大切です。

教師がみんなに聞こえる声で話すようにながす様子です。

「あの花は…。(5-1)」と発言するが、声が小さく学級全員に届く声になっていませんでした。そこで教師は、「みんな聞こえたかな。(5-2)」と笑顔できき、周りの子どもたちがききたいという思いをもっているということを、発言した子どもに伝えるようにしています。その後、「とっても素敵なことを言っているので…(5-3)」と、子どもの発言を評価する言葉かけをしています。更に、「みんなの方を向いて自信をもって、話してあげてください。(5-3)」と、みんなに届く声で発言することをうながしました。すると、子どもは自信をもち、その期待に応えようとみんなに届く声で発言することができました。

友だちが発表しているときに、話をきくことができている子どもに対して指導する様子です。

話をきくことができていなかった子どもが、「きいていませんでした。(6-3)」とあまり反省のない様子で応えていました。そのことに対し、教師は、強いまなざしで子どもを見つめ、「話している相手に失礼です。(6-4)」と毅然と対応しています。このことで、子どもは話している相手の立場に立つことができ、軽く考えていた自分の行動について振り返ることができたのではないのでしょうか。そのことが、「はい。(6-7)」と応え、きく姿勢を取ったことにつながりました。

5-1 C:あの花は、…(きこえない)。

5-2 T:みんなきこえたかな。

5-3 T:とっても素敵なことを言っているの、みんなの方を向いて自信をもって話してあげてください。
みんなも見てくれてますよ。

5-4 C:あの花は、お父さんの…(みんなに聞こえる声で発言する姿)



6-1 C:底面積×高さをすると、…(後略)。

6-2 T:〇〇くん、きいていましたか。

6-3 C:きいていませんでした。
(あまり反省のない様子)

6-4 T:それは、しっかり話している相手に対して失礼です。
(強いまなざしで子どもを見つめる。)

6-5 C:…。(真剣な表情になる。)

6-6 T:しっかりきいてくださいね。

6-7 C:はい。(きく姿勢を取る。)

この二つの事例では、他者の期待や他者に対する迷惑を考えることが、相手の立場に立ち、自分の行動を見つめ直すきっかけとなっています。そして、自分を見つめ直すことで、「みんなの期待に応えたい。」「他の人に迷惑をかけることはいけない。」と感じ、自分の行動を調整しようとする意識を高めることができます。

他者の立場に立って考えることができるようにする働きかけ

「励ます」「叱る」「考えさせる」「注意する」「見つめる」など

以上に述べてきたように、個人に対して「子ども自らがきまりや約束について考え、守ることができるようにする」「自尊心、自責感にうったえるようにする」「集団の一員として、他者の期待、他者への迷惑を考えられるようにする」という三つのポイントを意識し働きかけていきます。そうすることで、教師の押し付けにならず、子どもが自らきまりや約束を守っているという意識をもつことができるようになりますと考えます。

ほめる言葉を豊富にもつ

このクラスを参観させていただいたときの第一印象は、「メリハリがあり、秩序が保たれている」ということでした。授業を見ていると特に厳しく指導をされているわけはありませんが、学習規律が確立され、意欲的に子どもが学習しています。その理由は何なのだろうと授業を見ていると、「ほめる」言葉の多さに気付きました。

そこで、1時間の授業の中で、どのようなほめ方がされているか集めてみました。

- ・しっかりと返事ができたとき
「いい返事です。」
「今日は成功しそう。やる気を感じたよ。」
- ・わからないことをきくことができたとき
「そう、よく自分で尋ねることができましたね。」
- ・しっかりときく姿勢が取れたとき
「座った瞬間、素晴らしい姿勢の人。さすが、やる気のある1日を過ごすことができそうですね。」
「すぐに見てくれたね。すごい。」
「君のきき方、先生もやる気が出てきます。」
- ・発表ができたとき
「パンっ！（手を叩く）でたっ！（その意見待っていました。）」
「だんだんよい答えを考えることができてきましたね。」
「なるほどね。（ゆっくりとうなずきながら）」

このほかにもたくさんのほめ言葉がありました。上記に書かれたものを見るだけでも、様々な言葉を使って子どもたちをほめていることがわかります。「すごいね。」「よくできたね。」と子どもがしたことを直接評価するだけでなく、「先生もやる気が出てきます。」「パンっ！でたっ！」と先生が喜びを伝えることで子どもの行動や考えを評価しています。このように子どもを評価する豊富な言葉をもちたいですね。「子どものちょっとした行動を見逃さず、がんばる姿が見られたらほめる」ことが、学級に学習規律を保つ一因になると感じました。

◆ 集団に対する働きかけ

一人一人がきまりを守って行動することで、集団の中にきまりを守って行動するという雰囲気がつくられていきます。一方で、集団の中にきまりを守るという雰囲気があるから、一人一人も守っていこうという意識をもつことができるともいえます。だから、個に対する指導を行いながら、集団の雰囲気も高めていくということが必要です。きまりや約束が守られる雰囲気をつくるための集団に対する働きかけについて、以下の3点が重要です。

- きまりや約束が守られなかったときに、何らかのアクションをする
- きまりや約束を守っている子どもへの対応を大切にする
- きまりや約束をわかりやすい形で示し、習慣化していけるようにする

○ きまりや約束が守られなかったときに、何らかのアクションをする

示したきまりや約束が守られなかったとき、「これぐらいなら」「一人ぐらいなら」と安易に考えて指導することを怠れば、一線を引くことが難しくなり、「守らなくてもいい」という雰囲気をつくりだすことにつながります。きまりや約束が守られなかったときは、必ず何らかのアクションを取っていきます。きまりや約束が守れなければ、説明したり、注意したり、叱ったりし、次からどのように行動すればよいか考えさせる必要があります。学級のきまりや約束について学級会を開き、学級で話し合い、きまりや約束について改めて考える機会をつくることも効果的であると考えます。また、言葉だけでなく行動で示す必要もあるでしょう。

子どもたちに姿勢を正すことをうながすときの様子です。「姿勢を正しましょう。(7-1)」「全員できていますか。(7-3)」と声をかけても、まだできていない子どもがいました。そこで、近くに行って背中を軽くたたくことで注意をうながしています。教師は、言葉だけでなく、できていなければ行動に移して、みんなができるように働きかけています。このことで、子どもは、「先生は言うだけでなく、ちゃんと見ている。」という思いをもつことができたのではないのでしょうか。

7-1 T: では、姿勢を正しましょう。

7-2 C: (姿勢を正す姿。しかし、全員はできていない。)

7-3 T: 全員できていますか。

7-4 C: (まだできていない子ども)

7-5 T: (できていない子どもの近くに行って、背中を軽くたたいて注意をうながす。)

7-6 C: (姿勢を正す。)



このように、伝えたことを守るように働きかける教師の行動は、子どもたちがきまりや約束を守っていこうとする雰囲気をつくることにつながります。しかし、子どもたちは言われたらすぐできるとも限りません。ですから、何が何でもきまりや約束を守らせるという姿勢できつく指導しなければならないということではなく、子どもたちができるように、教師が粘り強く子どもたちに働きかけていくことが大切です。

きまりや約束を守る雰囲気をつくるための働きかけ

「説明する」「注意する」「叱る」「考えさせる」「できるように支援する」など

「言葉だけでなく行動に移す」

きまりが守れなかったときには、説明したり、注意したり、叱ったりして、子どもたちに今度どうしたらよいのか考えさせていくことが大切です。

しかし、言うだけでは、学級の雰囲気をつくっていくことはできません。きまりが守られている状態を回復することが必要です。言っただけで改善できる子どももいれば、改善できない子どももいます。例えば、机の上が散らかっている状態で、「机の上を整頓しましょう。」という言葉かけだけでできる子どももいれば、できない子どももいます。そのようなときは、教師と一緒に片付けるということも、ときには必要だと思います。そのときに、「どうしたらうまく片付けられるのか」を子どもは学んでいきます。

また、だれがしたことなのか特定できるときは、その子どもに注意をうながしていけばよいですが、だれがきまりを破ったかわからないこともあります。例えば、ボールはボール置きに片付けなければならないのに、運動場に放ったらかしにされているというような状況のときです。「きちんとボールは片付けましょう。」の一言で、だれかが片付けてくれればよいですが、責任がだれにあるかわからない場合は、だれも片付けず、そのままにされていることがあるのではないのでしょうか。そのようなことが続けば、「先生は言うだけだな。」と子どもたちに思わせてしまう原因をつくることになります。子どもたちが片付けるのであれば、片付けた状態になるまで見届ける必要があります。このように、きまりが守られている状態にできるだけ早く回復することが大切です。そのためには、教師は、言うだけではなく、現状が回復されるように行動に移すことが大切です。

様々な働きかけ

何か気になることがあったのか、なかなか学習に集中できない子どもがいました。その子どもが集中して学習に取り組むことができるように、担任の先生は様々な働きかけを行っておられました。

(集中できない子どもに対する働きかけ)

- ①近くに行って背中をポンとする。
- ②できるまで待つ。
- ③視線を送る。
- ④シンプルに「〇〇くん。」と言葉かけをする。
- ⑤「もう言わないよ。」と言葉かけをする。
- ⑥発言やつぶやきをうまく取り上げ、授業に生かす。
- ⑦机間指導で他の子どもたちから回り、意図的に時間を与える。



学級全体の様子に気を配りながらも、一人の子どもに対して、1時間の中で様々な指導や支援の仕方、子どもが集中できるように工夫されていました。このように様々な働きかけをし、子どもたちが学習に対して意欲的に取り組めるように支援していくことが、学習規律を確立していくことにつながるのだと感じました。

○きまりや約束を守っている子どもへの対応を大切にする

学級がうまく機能していないときほど、きまりや約束を守って行動できる子どもたちとの関係が崩れていないかを確認していく必要があります。きまりや約束を守らない子どもの対応に追われ、特定の子どもにばかりに目が向くようになれば、きまりや約束を守って行動している大半の子どもたちが置き去りにされることになります。でも、学級によりよい雰囲気をつくっているのは、きまりや約束を守って行動している子どもたちです。特定の子どもに対応しながらも、きまりや約束を守っている子どもの思いを大切にし、守っていることがよいという雰囲気を崩さないようにしていく必要があります。このことは、授業における子どものつぶやきなど、些細なことの対応でも同じです。

これから行う活動の説明をする様子です。教師が、活動の仕方について説明をしているときに、ある子どもが「先生、学校探検はいつするのですか。(8-2)」と説明の内容とは違うことを質問しています。教師はそれに対応せず、一通り説明し終わってから質問の時間を設け、日時を気にしていた子どもへの対応を行っています。日常の中でよく見る場面ですが、これは「しっかりと最後まで話をきこう」ときまりや約束を守っている子どもを大切にしたい行動であるといえます。説明の途中で、質問に対して教師が応えることは、「話を最後まで聞かなくてもよい」という無言のメッセージを発することになります。ちょっとしたことですが、これを日々繰り返していくようなことがあれば、学級の雰囲気に大きな差が出てくるのではないのでしょうか。

8-1 T：今から、生活科で行う学校探検の説明をします。2年生が1年生を…(中略)カードにシールを貼るようにしましょう。それから…。

8-2 C：先生、学校探検はいつするのですか。

8-3 T：(応答せず)

8-4 T：1年生には、自分で貼らせてあげてくださいね。どこに貼ったらよいか教えてあげましょう。

(中略)やることはわかったでしょうか。

8-5 T：他に何か質問はありますか。

8-6 C：学校探検はいつするのですか。

8-7 T：今週の金曜日の3時間目にします。



また、普段、規範を守っていない子どもが規範を守ったときは、次への意欲につなげたいとほめることが多いようです。しかし、いつも規範を守っている子どもがほめられないケースがあるのではないのでしょうか。やはり、当たり前のようにできていることを教師が忘れずほめていくことが大切です。そうすることで、子どもたちは、きまりや約束を守ることの素晴らしさを感じることができるでしょう。

きまりや約束を守っている子どもを大切にしたい働きかけ

「励ます」「勇気付ける」「ほめる」「子どもたちの行動を意味付ける」など

○きまりや約束をわかりやすい形で示し、習慣化していけるようにする

示したきまりや約束が学級の暗黙のルールのように機能し始めることが理想です。学習ルールや掃除や給食などの当番活動のルールなどは、子どもたちが自主的に活動できるようにわかりやすく示し、習慣化しておく必要があります。

忘れ物をしたときの指導の様子です。忘れ物をしたときに、週予定表に忘れたものを書き(9-1)、「今日はどうするのか(9-2)」「忘れないようにするためにこれからどうするのか(9-5)」ということを考え、教師に知らせに行くということが学級の約束になっていました。このように、わかりやすく約束をつくり、習慣化することで、教師がその都度指示しなくても自分で考えて行動できるようになっていきます。

宿題の出し方や次の授業の準備、給食当番の仕方など、わかりやすく手順を示し、習慣化できるようにしていく取組は数多くあります。その取組を習慣化できるまでには、時間をかけ、指導を継続して行っていくことが必要不可欠になります。

また、時間が経つにつれて馴れが生じ、できることをやらなくなる場合が出てくることもあります。そのため、定期的に決めたことがきちんと行われているかどうかを点検することが必要です。また、できていないときは、場合によっては教師がついてできるまで指導や支援を行っていくことが大切になります。学習のルールや生活のルールなどは、習慣化していくことで、子どもたちが自主的に活動できるようになっていきます。

9-1 C:(週予定表に忘れ物を書いて持ってくる。)

9-2 C:消しゴムを忘れたので貸してください。

9-3 T:どうぞ。

9-4 T:これから忘れないようにどうしますか。

9-5 C:(週予定表の)持ち物欄に書いて、予定表を見て用意をするようにします。

9-6 T:その方法でがんばりましょう。



習慣化していくための働きかけ

「ていねいにやり方を説明する」「できているかどうかを確認する」「定期的に振り返る」「手順を示したものを掲示する」「自分なりの方法を考えさせる」「できるように支援する」など

習慣化していくために手順を示す

(登校したときの約束) 低学年の例

①きょうかしょやひっきぐをつくえにいれる

②しゅくだいのぷりんとをひらいてかごにいれる

③れんらくちょうをかごにいれる

④らんどせるをたなにいれる

特に低学年は、わかりやすく手順を示すことで安心して行動できるようになります。

IV. 振り返り（評価）をする

きまりや約束の大切さを実感するときは、きまりや約束が破られたときであることが多いです。きまりや約束を守れなかったことに対して、教師から注意を受けたり、他の子どもたちから非難の声が上がったりすることで、きまりや約束を改めて意識します。マイナス面を見て、守らなければならないと気付く実感の仕方です。このときは必ず、次はどうしたらよいかということを考えなければなりません。教師が一方的に決めるのではなく、子どもたちと一緒にどうすればよいかを考えることで、きまりや約束をより意識できるようになります。

マイナス面を見て、きまりや約束の必要性を実感することも大切ですが、プラス面を見て、「きまりや約束を守っていこう」と実感することを増やしていきたいものです。そのために、まずは、教師が積極的に、子どもたちがきまりや約束を守って行動していたことを評価することが大切です。そして、次の活動につなげるようにします。

■ 子どもたちの様子を見守り、評価する

職員室から、運動場にいる子どもたちの様子をうかがう先生がおられました。次の時間は体育だったのでしょう。チャイムが鳴ったので、運動場に出て行かれるかなと思って見ていると、まだ、動く様子はありません。しばらくしてから

「よしっ！」

と嬉しそうな笑みを浮かべながら運動場に出て行かれました。



子どもたちが整列している前に行くと、開口一番、「君たち、すごいな。やっぱり素晴らしい。この間、先生が『体育が始まるまでに用意しておこうな。』って言っていたことをしっかり覚えていたんやね。今日は、見てください。自分たちで用意できました。先生が言わなくても、考えて行動できたね。みんな、どんどんよくなっているし、これからもっとよくなっていくよ。この調子でやっていこう。」

ほめられている子どもたちも嬉しそうでしたが、ほめている先生が一番嬉しそうな様子でした。

子どもたちは、自分たちが頑張ったことをほめられ、嬉しかったことでしょう。そして、「自分たちのがんばりを認めてくれる。」「そのがんばりを自分のことのように喜んでくれる。」そんな先生の様子を見て、次もがんばろうという気持ちを子どもたちはもつことができたのではないのでしょうか。

また、プラス面を見てきまりや約束の必要性を実感できるようにするために、次に考えたいことは、子どもたちがうまく活動できた理由を振り返ることができるように支援していくことです。うまく活動ができたときは、「楽しかったことは何か」「思い出に残ったことは何か」ということなど、出来事を振り返ることが多く、どうしてうまく活動できたのかという理由を振り返ることがあまりありません。子どもたちが振り返るときに、「どうしてうまく活動できたのか」ということも振り返ることができるようにすることが大切です。きまりや約束を守るこ

とで楽しく活動できたと考えることができるようになれば、きまりや約束が「～しなければならぬ」から「～しよう」という形に変わっていくのではないのでしょうか。更に、きまりや約束を守って行動することが、学級の目標の実現につながっていると意識できるように、教師が働きかけていくことが大切です。

定期的に振り返り，きまりや約束の大切さを感じられるようにする

□4月に

4月の段階では、一つ一つきまりや約束を確認し、ていねいに指導、支援していきます。この時期は叱って指導するというより、わかりやすく手順などを説明し指導、支援していくというイメージです。この時期にていねいにきまりや約束を確認していくことで、どのように行動すればよいのかという学級の枠組ができていきます。枠組ができれば、子どもたちはその中で安心して活動することができるようになります。

□朝の会，帰りの会に

朝の会では、その日に意識していきたいことを伝えます。そして帰りの会で、できていたかどうかを振り返るようにします。教師は、できていたときは大いにほめ、できていなかったときはどうしていったらよいのかを伝えます。くどくどとした説教にならないようにポイントを絞り、子どもたちが「明日がんばっていこう。」という気持ちをもつことができるようにします。

□定期的に

定期的に学級のきまりや約束を見直していきます。きまりや約束によっては、いちいち明文化していく必要のなくなるものもでてきます。そのようなときは学級で話し合い、よりよいきまりや約束に変えていけるようにしましょう。

□活動の前後に

事前指導として、活動のきまりや約束を確かめておきます。学年に応じて、教師が示していく場合と子どもたちに考えさせていく場合とを使い分けていきます。事前に確認しておくのとおかないのとでは、後の指導の子どもたちへの届け方が変わってきます。

事後指導では、活動のよかったことや楽しかったこととともに、活動の約束を守ることができていたかどうかを振り返ります。そのことで、きまりや約束を守って活動することで、楽しい活動ができることを確認していきます。

□長期休業前後に

学級目標を振り返り、達成状況を確認します。学級目標に向かうための学級のきまりや約束を守っていたかどうかを振り返っていきます。この振り返りを長期休業後に生かし、個人の目標を立てたり、特に意識したいきまりや約束を考えたりするようにします。

□年度末に

1年間でできるようになったことを振り返り、次年度につなげていけるようにします。次の学年に申し送りすることで、系統立てて指導、支援していくことができます。

V. 人間関係をつくる

教室の雰囲気をつくっていくためには、先述したように、ルールを徹底していくことが大切です。しかし、ルールを徹底するというだけでは、血の通わない冷たいルールになってしまいます。本来、ルールとは多様な考えをもった人たちが居心地よく過ごしたり、よりよい人間関係を築いたりしていくためのものです。ルールを守らせることが目的なのではなく、ルールを守ることで、人とのつながりを感じ、楽しく過ごせることが目的なのです。そのためには、温かい人間関係の中で、ルールを守る経験を積んでいくことが大切です。教師と子どもの信頼関係、子どもと子どもの信頼関係をつくっていくことは、きまりや約束を守り、一人一人の個性が尊重される学級にしていくために必要不可欠です。

◆信頼関係を築いていくために

- ①教師が率先して心を開く
- ②子どもと関わる時間を大切にする
- ③子どもと子どものつながりをつくる



① 教師が率先して心を開く

子どもたちの様子を見ていて、「何か固さが見られるな。」と思ったら、一度自分の様子を振り返ってみることも大切です。案外、教師自身の固さが子どもに伝わっていたりするものです。子どもたちが心を開いていけるようにするためには、まず、教師が心を開いていくことです。子どもたちは、先生の話をお聞きすることが大好きです。先生の子どものころの話や、家族のことなど興味津々で聞いてくれます。授業をしっかり進めていくことも大切ですが、ときには脱線して子どもたちとの心の距離を縮める話をすることも大切ではないでしょうか。

② 子どもと関わる時間を大切にする

子どもはとても教師のことをよく見ています。教師が忙しくしていれば、子どもは、「今、話しかけたら悪いかな。」と話したいことがあっても、声をかけるのをやめてしまうこともあります。だから、休み時間などに、子どもが話しかけやすい雰囲気を教師がつくるのが大切です。授業の準備など、様々な仕事を休み時間にもしなければならぬので、「中間休みは子どもと接する時間にしよう。」というように、意図的に時間を設定することが有効であると思います。また、放課後にすぐ職員室に帰ってしまうのではなく、少し教室に残っていると子どもたちが話しかけてくることもあります。何気ないおしゃべりが子どもとの距離を縮めたり、クラスの問題点を発見したりする機会になります。

③ 子どもと子どものつながりをつくる

4月初めは、子どもたちの人間関係もまだできていません。そのようなときに、簡単に楽しめる遊びを取り入れることで、子どもたちの人間関係をつくっていくとともに、

学級の温かい雰囲気をつくっていくことができます。「笑顔」はクラスの雰囲気をつくっていく上でとても重要です。笑顔が笑顔を生み、学級の雰囲気をどんどんよくしていきます。学習中にも、「たし算リレー」のようなゲーム性のある活動を取り入れ、楽しく学習する時間があってもよいのではないのでしょうか。最近の子どもたちは、つながる力が低下してきているといわれています。初めは、教師主導の遊びを取り入れ、徐々に子どもたち同士の関わり合いの多い遊びに移行していくといった配慮も必要でしょう。

また、休み時間など運動場に出て、子どもたちと一緒に遊ぶと子どもたちとの距離が縮まるとともに、教師自身の気分もすっきりとします。授業時間には見せない子どもの一面を見ることができ、関わり方の参考にもなります。

子どもとの時間を大切に

〔登校時に〕

教室で子どもを待ち、「おはよう。」と子どもたちに声をかける。子どもたちとの信頼関係をつくっていくためには、このような時間が大切になるのではないのでしょうか。朝は、授業の準備等でバタバタとする時間帯です。計画的に準備を進めることが必要です。

〔休み時間に〕

特に低学年の子どもたちは、先生と一緒に遊ぶことを望みます。たくさん子どもたちが、様々な遊びをしようと誘ってきます。忙しくしていて、「次の休み時間にね。」と断ることがあります。しかし、一度断ると、もう「遊ぼう。」と言ってこなくなる子どももいます。「あのとき遊んでいれば…」と後で後悔することがあります。子どもとの人間関係を深めるせっかくのチャンスを逃さないためにも、休み時間はゆとりをもって、子どもたちと関わるができるようにすることが大切です。

〔給食時間に〕

子どもたちは、先生が班に入って、給食を一緒に食べてくれることを喜びます。順番にいろいろな班に入っていくと、今、はやっていることや、どのような遊びをしているかなど、子どもたちの様子を知ることできます。給食時間も、丸付けなどやることはたくさんありますが、時間を決めて子どもたちとおしゃべりを楽しむことで信頼関係を更に深めたいですね。

〔授業中に〕

子どもたちがしっかりと学ぶことができているかを、一人一人に気を配り確認していくことが大切です。一斉指導のときは教室全体を見渡し、個別指導・グループ指導のときは困りがないかどうかを一度確認し、それから困りのある子どもの支援をして、全体に目が行き届くようにしたいですね。

〔放課後に〕

教室に残っていると、「先生、きいて。」と友だち関係の悩みを打ち明けてくれた子どもがいます。子どもの中には、じっくりと先生に話をきいてほしいと思っている子どもがいるのです。放課後は教師もゆったりと子どもの話に耳を傾けることができるので、信頼関係を築くうってつけの時間ではないのでしょうか。

◆信頼関係を築く教師の姿勢

教師が授業の中で、どのような姿勢で子どもたちに接することが信頼関係を築いていくのかということについてみていきます。信頼関係をみるときの一つのバロメータとして、子どもの学習に対する姿勢が挙げられると思います。しっかりと学習しているときは、学級内の信頼関係もできています。そこで、子どもたちの私語がなく、集中して学習に取り組んでいるときに注目し、その授業の中で共通する教師の姿勢について特徴的なものを取り上げ、以下に示しました。

信頼関係を築く教師の姿勢

□笑顔がある

□ユーモアがある

笑顔やユーモアを見せるということは、教師が積極的に自己開示し、明るい学級の雰囲気をつくっていくということです。笑顔は、だれにでもできることでありながら、いつも笑顔でいることは実際にはなかなか難しいことです。しかし、教室に温かい雰囲気をつくっていくためには、教師の笑顔は欠かすことができません。

□ゆとりをもって子どもたちと接している

子どもたちが活動するときどのような行動をするかを予測して、事前に対応を考えておきます。そうすることで、ゆとりをもって子どもたちに対応することができます。何かあったときでも落ち着いて対応することが、子どもたちに安心感を与えます。

□メリハリがある

「ほめるときはほめる」「叱るときは叱る」といったメリハリのある接し方をすることが大切です。またそれだけでなく、子どもたちが意欲的に活動に取り組めるように、メリハリのある授業展開を工夫するというのも大切です。集中力が途切れないように工夫することは、それだけ注意することも減るということです。子どもたちが叱られるという状況を意図的になくしていくということも、人間関係をつくる上で大切なことでしょう。

□一貫性がある

子どもたちが非常に敏感に反応するところです。人、あるいは時と場合によって、教師の対応の仕方が変わらないように心掛ける必要があります。「あの人は怒られないのに…」「あのときはよかったのに…」という思いが、教師に対する不信感につながります。一貫して決めたことを取り組んでいく姿勢が大切です。

□子どもの良さに目を向けている

□子どもの思いを受けとめ、教師の思いを伝えている

教師が子どもを見守り、子どもの思いを受けとめていくことが大切です。子どもの良さに目を向けることで、ほめることが多くなります。また、子どもの思いに耳を傾ける姿勢を取ることで、子どもたちは認めてもらえているという気持ちをもつことができます。更に、教師の思いも折にふれて伝えることが大切です。教師が思いを子どもたちに伝えていくことは、「このような学級にしたい。」ということ子どもたちと共有することにもつながると考えます。

○学級にきまりや約束を共有する教師の働きかけのまとめ

【規範を内面化していく過程】	【教師の指導行動(働きかけ)】
<p>学級目標・活動の目標を意識する。</p>	<p>目的をもつことができるようにする</p> <ul style="list-style-type: none"> ○目標を意識させる。 →規範を守る目的として位置付ける。 ※目標を意識する子どもはきまりを大切にする傾向がある。
<p>①規範(きまりや約束)の重要性を認識する。</p>	<p>きまりや約束を明示する</p> <ul style="list-style-type: none"> ○規範は、目的ではなく、手段として機能させる。 ○行動目標的な規範の示し方をする。 例)「友だちと仲良くしよう。」 ○発達段階に応じて、具体的な規範の示し方をする 例)「友だちを叩いてはいけない。」 <p>《日常の取組》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○認知面に働きかける…規範についてわかるようにする。 ○行動面に働きかける…規範に沿った行動ができるようにする。 ○感情面に働きかける…規範の大切さを感じることができるようになる。
<p>②規範(きまりや約束)を守って行動する。</p>	<p>きまりや約束を守ろうとする雰囲気をつくる</p> <p>《個に対する指導行動》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○子ども自らが規範について考え、守ることができるようになる。 ○自尊心、自責感にうったえるようにする。 <p>《集団に対する指導行動》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○規範が守られなかったときに、何らかのアクションをする。 ○規範を守っている子どもへの対応を大切にする。 ○規範をわかりやすい形で示し、習慣化していけるようにする。
<p>③規範(きまりや約束)の大切さを実感する。</p>	<p>振り返り(評価)をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ○きまりや約束を守ったことが(学級)目標につながるということを意識できるようにする。 ○守れていることを認め、子どもたちの意欲を高めることができるようにする。 ○次にどうしたらよいかを考えることができるようにする。
<p>人間関係を築く。</p>	<p>人間関係をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教師の姿勢…信念、一貫性、親和性などを発揮し、自らも集団の雰囲気を形成している一員であること意識する。 ○教師と子ども…自己開示、笑顔、会話など積極的に子どもたちに働きかけ ○子どもと子ども…心理的なつながりを大切にする。 ○集団の雰囲気…所属感、連帯感を高め、認め合える集団の雰囲気をつくる。

○よりよい学級集団へ

きまりや約束を共有し、よりよい学級集団をつくっていくことに近道はありません。きまりや約束を共有していくためには、「指示を出したら、できているかどうかを確認し、評価する」、そのような日々の地道な働きかけを積み上げていくほかありません。子どもたちがよりよくなりたいという願いを表現する4月に、きまりや約束をつくることで学級の方向性を示し、子どもたちが安心して活動できる学級をつくっていくことが大切です。

また、きまりや約束が定着しているように見えても、それが管理的な目的のみで行われていけば、いつか学級はうまく機能しなくなっていくでしょう。意図もわからず、押し付けられたきまりや約束ならば、いずれ守られなくなっていくます。子どもたちが、なぜ守らないといけないのかということをしつかりと理解し、子どもたちのよりよい成長をうながすためのきまりや約束づくりをしていきたいものです。

最終的には、子どもたち自らがきまりや約束を守っていける力を付けていかなければなりません。きまりや約束を大切に守ろうとする学級の雰囲気の中で、一人一人の規範意識を育むことが大切です。規範意識を育んでいくことで、自分で判断し、その場に応じた行動を選択していくことができるようになります。一人一人の規範意識を高め、学級集団を自発的、自治的な活動ができる集団へと高めていくことができればと思います。

《参考文献》

- 河村茂雄『日本の学級集団と学級経営』図書文化 2010.5
- 諸富祥彦編『ちょっと先輩が教え“うまくいく”仕事のコツ』教育開発研究所 2011.4
- 『児童心理臨時増刊 No. 930 スタートダッシュ「学級づくり」』金子書房 2011.4
- 今泉博, 佐藤隆, 山崎隆夫, 渡辺克哉『若い教師のステップアップ4学級経営力』旬報社 2004.12
- 曾山和彦編『子ども集団が動く学級づくり』教育開発研究所 2011.3
- 伊垣尚人『子どもの力を引き出すクラスルールの作り方』ナツメ社 2011.4
- 羽豆成二『図解学級経営』東洋館出版社 2004.3
- 高階玲治編『学習のしつけ・生活のしつけ』教育開発研究所 2007.7
- 教師の技と心研究会『学級経営MAP』東洋館出版社 2005.6
- 北折充隆『社会規範からの逸脱行動に関する心理学的研究』風間書房 2007.11
- 山岸明子『発達をうながす教育心理学』新曜社 2009.6
- 末吉僚子『人間形成の日米比較』中公新書 1992.3
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説特別活動編』東洋出版社 2009.8
- 加藤弘通・大久保智生「学校・学級の荒れと教師-生徒関係についての研究—問題行動をしていない生徒に注目して—」『パーソナリティ研究第13巻第2号』 2005.12
- 長峰伸治・澤祐紀恵「小学校の担任教師の指導行動・態度と児童の学校適応間の関連について」金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要 2009.2